

(シンポジウム1「命と暮らしを支える看護師を育てる」)基礎看護教育の立場から-コロナ禍におけるICTの活用とロールプレイング実習の実践-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石舘, 美弥子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00033175

基礎看護教育の立場から

ーコロナ禍における ICT の活用とロールプレイング実習の実践ー

石舘 美弥子

(帝京大学医療技術学部看護学科 教授)

1. コロナ禍による影響

新型コロナウイルス感染症が世界規模で大流行した 2020 年、大学での対面授業は中止となり、臨地実習の実施は困難を極めた。看護教育に携わって 20 年以上、これまで当たり前に行われていた対面授業、臨地実習が叶わない状況で対応策に追われた。折しも 2022 年度入学生から適用される第 5 次カリキュラム改正内容の検討の時期と重なっていた。地域包括ケアシステム構築が推進されている背景の中、看護師には、対象の多様性・複雑性に対応した「看護実践能力」が求められている。看護師を養成する立場として「看護実践能力」は、多様な場、多様な人を対象とする臨地実習において磨かれるものとする。しかしながら、新型コロナウイルス感染症が蔓延する現在、弾力的に学修方法を検討していくことが必須となった。

2. リアルタイム配信の学内ロールプレイング実習

教員間で模擬患者の事例検討を行い、ペーパーペイシエントを作成した。学生には、事例情報から必要な看護計画の立案を求めた。子どもの状況をアセスメントし、その認知発達段階に応じたツールを取り入れた「プレパレーション」の実施計画であった。学生が工夫した手作りの絵本や紙芝居などはいずれも力作揃いだった。実習室に設営した模擬病室は、学生の援助行動を全方位より観察するため端末 2 台に加えて外付けカメラを設置した。教員は、看護師・家族(父親・母親)を演じ分けながら、臨場感のある場面を作るよう努めた。学生の一連の看護援助に対して、遠隔で参加した臨地実習指導者によってフィードバックされた。引き続き実施したオンラインカンファレンスは、学生・臨地実習指導者・教員の参加のもと、看護援助を振り返り活発な意見交換の場となった。

3. 看護学教育の可能性

今回、臨地以外で学ばざるを得ない状況に直面したことで実習方法のリコンストラクションを図る機会を得た。つまり、臨地実習の代替策を講じる必要に迫られて初めて、新しい方法論の検討に繋がったわけである。学内で実施したロールプレイング実習は、臨地実習の質的水準を一定程度維持する学修方法と評価できた。また、臨地と学内を繋ぐオンラインコミュニケーションは、時間や場所にとらわれない教育環境の可能性を示した。

今後、少子化の影響による実習施設の確保問題はますます厳しくなることが予想される。加えて新型コロナウイルス感染症流行の先行きが見えない今、基礎看護教育のパラダイムシフトとともに実習方法のさらなるリコンストラクションが迫られている。少子化時代の生活体験の乏しい学生たちに多様な場で求められる「看護実践能力」をいかに身につけてもらうのか、基礎看護教育の立場として、ICT の積極的な活用など、時代に即した教育方法を継続的に検討していく必要がある。